

満州からソ連抑留の四年四カ月

香川県 日下瑞穂

私は大正六（一九一七）年一月二日、この小豆島に生れました。中学を卒業して昭和十二（一九三七）年に連隊区である丸亀にて兵隊検査を受けましたが生来身長も低く、丙種合格となり、兵役免除の身となりました。

当時は軍国主義時代で世相も厳しい時代でしたので、兵隊へ行かない身としては、肩身のせまい思いをしました。が「産業報国もお国のため」と思いつつ、地元の醤油製造会社の丸金醤油(株)に勤務しました。

丸金醤油(株)は小豆島の醤油として全国的に有名です。明治四十（一九〇七）年の創業です。当時小豆島には百軒を超える醤油業者が存在し、その中で丸金醤油の生産高は、創業時でも千八十キロリットルで、翌年には早くも関西方面にも拡販す

るなど漸時全国規模の醤油メーカーとして発展を遂げていました。

一方、我が国の東アジアでの地位が向上し、我が産業の発展に伴って、丸金の醤油も東アジア向けに輸出が拡大してゆきました。しかし戦域の拡大することにより、だんだん輸出も困難となりました。

そこで満州も原料となる大豆の生産地となりつつあることから、昭和十五年に満州醤油(株)、同十七年には朝鮮丸金醤油(株)を設立、昭和十八年から小豆島からの輸出に代わって現地から輸出を始めるようになりました。

このような状況下で、私も満州醤油(株)の創業に合わせて渡満し、現地企業の工務課に勤務して醤油の生産に従事していました。

大東亜戦争の拡大と戦況の悪化は、ひしひしと満州にも及び、関東軍を主体とする満州部隊も漸時、内地、南方へ転用され、独立守備隊までも海上機動旅団に編成されて、南方各地、北方へと展

開してゆく情勢となりました。

そしてソ連との国境方面の防衛が手薄となったためでしょう、根こそぎ動員といわれた動員が行われ、とうとう私も丙種の兵隊でありながら召集を受けました。すでに昭和二十年五月十日という、ソ連軍の満州侵攻の三カ月前で、当時私は二十九歳での応召でした。

入隊した部隊は満州第一一九部隊で工兵隊に編入されました。国境警備で們門付近の防衛についていました。その後、ソ連侵攻による満州の惨状と混乱はご承知のとおりです。

そしてソ連軍の捕虜となり、樺太の対岸、第二〇一分所に千人単位で入所、三人一組で森林伐採をしてソリで運んだ、など断片的な記憶しかありません。すべて忘却のかなたになってしまいました。

ただ、こうして昭和二十年から四年四カ月シベリア抑留の体験を強いられ、昭和二十四年十一月、ナホトカから舞鶴へ上陸、帰国しましたが、丸金

醤油は、昭和三十七年に小豆島内の醤油会社四社と合併、また平成十二年には忠勇(株)と合併し、社名も新しいマルキン忠勇(株)が誕生しました。最近の醤油の出荷量は三万二千五百キロリットル(平成十七年実績)の規模に達しています。

私は現在、八十九歳、すべて忘れてしまいましたが、その後小豆島の内海町老人クラブ草壁福寿会、小豆島農村歌舞伎・梅好会の会長などをして体だけは健康にしております。